

芭蕉百回忌『蕉翁追善集』と翻刻一

杉田 美登

一

芭蕉追悼については早く、松尾芭蕉が没した元禄七（一六九四）年に、門人宝井其角によって初の芭蕉伝記『枯尾花』が刊行され、翌八年には齋部（八十村）路通によって『芭蕉翁行状記』が刊行されている。

一方芭蕉没後の蕉風俳諧は、俗談平話を旨とする美濃派各務支考や麦林舎中川乙由によって支麦の徒として謗られながらも、江戸を始めとして全国を席卷していったことは周知のことである。これらの俳諧の横行に対して、明和（一七六四〜七二）ころから寛政（一七八九〜一八〇一）頃にかけて芭蕉復帰を唱え、蕉風を掲げつつ蕉風とは趣の異なつた新風を展開していった中興期俳諧時代が到来する。例えば、京都の蕪村・太祇が、尾張では暁台また金沢の蘭更、江戸の白雄というように新風の樹立の気運は高まつて行く。そのあらわれとして、上梓されて今日に残っている芭蕉句集や追善集あるいは句碑である。

この流れは都市部ばかりではなく地方においても芭蕉顕彰の気運が高まつて行った。芭蕉没後の八十・百回忌を迎えるころに入ると、これまで盛んだった商業都市・城下町・港町・宿駅の俳諧人口に加えて農村部の有力農民層にまで浸透して行くことになる。

中興期を代表する俳人高桑蘭更（半化坊）を例に挙げてみる。彼は蕉風復古運動として芭蕉の初期の蕉風を唱えた人物である。諸国を回り蕉風に帰るべきを唱えて明和七年に金沢の浅野川の辺にあつた二夜庵をあとに江戸への旅に出る。その足跡の一端がこれまでに編さんした妙高市宝蔵院文書、『妙高山雲上寺宝蔵院日記』に記されていたので紹介したい。金沢を出発した蘭更は高田

・倉石を通り俳人隣々と甚化の二人を伴つて明和七（一七七〇）年閏六月一日に越後と信州の境、関山にある宝蔵院に到着する。関山は宿駅であり、文化も高く古くから俳諧の盛んな地でもあり、半化坊を迎える連衆が存在したからである。

明和七庚寅年閏六月一九日条に、

一九日 晴天 倉石ヨリ、半化先生門人兩人召連参、直ニ湯元へ。半化

門人隣々ハ此方ニ止宿いたす。二二日 晴夜雨 今日隣々湯元江行く。

二三日 晴れ 今昼、半化坊・甚化・隣々湯元ヨリ帰ル。二四日 大鹿

与三右衛門望月九郎右衛門参上。半化坊・隣々昼立ニ而野尻へ行。僕ヲ

送り遣ス。甚化高田へ帰ル。

（『妙高山雲上寺宝蔵院日記』第一巻・妙高市教育委員会・平成二〇年刊行）

蘭更（半化坊）は同二四日昼まで滞在し、俳諧のあるべき姿の伝搬者として信州野尻湖に向けて隣々と旅立っている。信州・甲斐に曳杖したことは知られていたがこの途中経過については知られていなかった。（『宝蔵院日記の風景』平成一〇年刊・妙高市教育委員会編・拙著）

二

ここに翻刻紹介する『蕉翁追善集』は越後国高田（現新潟県上越市高田）の俳人南嶺庵梅至が編さんしたものである。高田の俳人鈴木浣花井甘井によると、梅至は芭蕉翁百回忌追善集の刊行を思い立った安永九年には既に八十才の高齢であり、百年の遠忌まで齢をのぶることは不可能と考え、繰り上げて刊行

すること八十才の賀をも兼ねたいと考えたのである。

梅至は遡る宝暦十三癸未（一七六三）年に粟津（滋賀県大津市）の義仲寺に赴き、芭蕉の墓参を行い、芭蕉の眠る墳墓の土を乞い求めて帰る。そして、その命日にあたる十月十二日に城下の禅林正輪寺境内に「景清も花見の座には七兵衛」の句碑を建立して芭蕉の追善供養を行ったのである。

かくして梅至は安永九（一七八〇）年、芭蕉が敬愛して止まなかつた西行の命日に因んで「如月の望の日も近い二月、芭蕉の命日である十二日の朝辰の剋から芭蕉の亡くなった申の剋まで俳諧の会を催した。高田藩の俳人七十二名と江戸の蓼太や洛の蘭更を始めとして全国の俳諧宗匠から句を贈られ、百韻連句二十余巻に手向けの章句二五〇〇余りを供えた。このとき梅至は門人二十一人と共に自らの発句「梅が香や言にも勝る魂よはひ」を発句に俳諧百韻を巻いている。

『芭蕉翁桃青居士・終焉記・江州粟津義仲寺』（元禄七年十月十二日に刊行）をもとに梅至が杉風筆の芭蕉像を描いたことは、「右芭蕉像者古人杉風氏書写也。今応某氏需東都岷雪再模之」の文と本書『蕉翁追全集』の「右蕉翁像者古人杉風氏書写也。今応某氏需東都岷雪再模之。今亦梅至一毛不添私茲に拝模之。」とを比較することで明らかである。

三

装訂 袋綴じ

表紙 茶色

縦二二センチ八ミリ×横一六センチ

題箋 中央「蕉翁（横書き） 追善集」縦一六センチ五ミリ・横三センチ

三ミリ

巻数 一卷

冊数 一冊

行数 本文 每葉八及び九行

版元 京寺町通二条 橘屋治兵衛梓

所蔵者 上越高田図書館

四

一丁表

秀歌読んと住よしへ月詣せし法師の心さしをつかんとてや、南嶺庵の叟ことし八十の春の華をあらはにむかへてより、蕉翁の滅後もはや百年のとし並の程なきを指折て高城の風士の限りを尽し、其如月の望の日も遠く追善のむしろをひしき百韻二十余巻のことのはを備ふ。此叟や世を市中に遁れて一とせはみちのくの旅寝にやつれ一とせ

一丁裏

は木曾塚の佛をしたひ、一とせ花見塚を築きてのち年々に越路の華にむかしをしのびぬれば、けふこそ翁も此花を見給はめとなつかしき志を助けてはじめに記す。

安永九年庚子春 浣花井 井井

印 浣花井

二丁表

翁塚説

そもや一流の太祖となる事軽からず。彼苦漏風雲寒き夜川舟に乗まいらせ来て、さゝ浪寄する寺の前木曾殿の際に築り。されは墓角草茂て人の尋るなきは、已知られさるの愁成へし。かたのことく此塚は遠きも近きも詣来りて尊敬し、仰く事是人の己を知るの喜びならずや。其徒の多士の拈香は近江の富士の峯

に、靡檣闕伽の手向は湖水の汀に泳々たり。

梅至

四丁面

二丁裏

「芭蕉像」

右蕉翁像者古人杉風氏書写也。今応某氏需東都岷雪再模之。今亦梅至一毛不添私茲に拝模之。

三丁面

懷古一折 末略

梅が香や言にも勝る魂よはひ

梅至

汲ぬ里なき峯の雪汁

磯鳥

麗な霽に御駕の戸の明て

呉川

人の心は顔に知らるゝ

花麴

連綿と縁の続も歌なれば

三双

とれぬ燈に虫の往来ふ

杉里

弓の月弭際纏香残り

梅塙

三丁表

皿に桃盛る船の込乗

可然

老たれは思ふ事のみ虚寒く

蛙眠

柴一束翌の貯え

爾鍵

野鼠の穴も賢く掘つゝり

斧休

聖に学堰の水筋

和水

朝風の里に冬知る鐘印

米翁

酒の小売の新家めでたき

素琴

今は子に有し美人の顔醒る

祖明

御主の恋に百里来て泣く

風五

月明かし露漏宿の萩の色

野鶴

己と落る棚の南瓜

鷺十

野の宮の別れは昔今迎も

玄吾

清き流に渡す石橋

泰亀

咲花に群来る友の隔なき

井井

日は永けれど茶話の尽せず

爪牛

四丁裏

五々巻発句

筆まめに書事もなし秋の暮

浣花井井井

乱るゝとおもへば砧止にけり

野鶴

雁飛て枯草伏る勢かな

牛爪

世捨人の心任やころもかへ

梅塙

鶯の声曇なき天気也

畝司

夕立や晴ては草に風の色

李長

寝つ起つ籬の外の花

胡友

若草や日に日に沈む丘の石

斧休

五丁面

鷲の行方や深雪の数十丈

可然

霜に撫す頬に立か夜の鴨

祖明

原中や思ひ似つかぬ鹿の声

花麴

世を忍身の思ひ出や小夜砧

磯鳥

月は宵推も敲も酒の門

鷺太

魚折々水の面に光る春の雨
蛙眠
百年の昔を鳴よ謀轍鳥
鷺十
時雨るゝや今は粟津の何仏
梅宇

五丁裏

言の葉の詠や落ち葉の幾巡り
加音
好んても見る芸はなし節季候
宴他
むら松の声の間に間に千鳥也
風五
塵塚や雁の何ける春の雪
和水
鶯や左右に鳴て左右なし
泰龜
花を憂しと思ふは花を思哉
素菊
苗代や雲井の緑水に照る
爾鍵
澄物は蝶とのぼるや杜若
米翁

六丁面

こは祖翁の金詠命終近十月八かの夜の吟也。是や誠に一休禪師の胸中を移て人間一生の上を伸給ふ物にや。其句を枯野を廻る夢心ともせばやと宣ひしか、是さへ妄執ながら風雅の上に死ん身の道を切に思也と按給ふとそ。同十二日申の刻に此の世を去り在す。御身の一句を期迄鍛錬し給ふ事今の人涙を落さざらんや。是則末世の規模也。単作者を等閑に言捨べけんや。

六丁裏

旅に病で夢は枯野をかけ廻る
桃青居士
橋立やじまぬ松の一字
露川居士
洪柿や売人なかくする供溜り
尾馬州
寝た形に畳窪むや五月雨
巻耳

炭竈や碎て渡る朝鳥
有隣
秋の蝶赤ふもならで舞にけり
遠州菊後
春雨や念仏の音の乞食小屋
佐屋吟山
水鳥や逆巻波に懷手
蛙流
雪の世の姿や遠の鐘の声
白之

七丁面

牛若の影身に添うや風巾
素丁
其梅に其鳥なくもほとゝきす
四日市
我は邪布の月の最中に古ま色
尾布磧
片枝は咲かで止しか帰り花
東都蓼太
百迄は花で請けるふくべかな
加見風
根をよけてたけよさくらに狂人
洛蘭更
苗代も桜につゝく詠かな
諏訪文輔
わか物を見する手もなし月の客
江戸
甚化

七丁裏

句坐任到来

短夜を妻戸に書て戻る憂さ
小泉花鳥
夕立や蟬の時雨に聞かはり
小泉至虹
交りし雲の捨てや練雲雀
小泉素明
今来んと待しは水に蚊遣哉
信赤沼
秋なれや笑事にも我ひとり
信赤沼一瓢
玉柴

浜松に風なき昼の暑哉 信赤沼杉路

昼顔や人も短き影法師 信赤沼柏士

待人は寝間も有に蜀魄 信赤沼如印

涼しさや頬に動く池の水 信赤沼壺泉

八丁面

詠ふ有恨声有り野洛の虫 十日町 桃路

香焼くて壁に向へは蟋蟀 堀之内徐々坊

巔は兀ても裾はさくらかな 猪ノ山扇狩

虫鳴や荊藪にも隙有 おなしく

目の前の仇波見つゝ芥子の花

長森 梅取

世はなしと獨住家も砧哉 おなしく

心には何の業なき涼哉 路因

見返れば月は入鳧橋の霜 李彦

勇む身は物に危し火取虫 千和

八丁裏

笞舟の軒に動く柯かな 浦梨 杉里

水に残る匂や菊の雫より 土吉野 如虹

霜の菊蘭陵の美酒下りけん 思工

笈捨て主は葦に居睡りぬ 李翠

風懸て落葉に月の氷る影 文亭

百年も品の替らぬ花野哉 柳枝

蜀に何恥ん紅葉の高尾寺 花北

形こそ案山子なるらめなど心 江雨

夢想

宵闇を官司に包蚩哉 詞邦

九丁面

増す荒男の立尽したり小夜砧

行当る物に這ふ也かたつふり

君か為我か蚊は追ぬ今宵哉

夜寒さや更ては元の風ならず 山直海 梅仙

何鳴そ枯尽す野の夕鳥 小苗代 至鳥

冬籠る暦の月日や窓一つ 和東

如川

畝波連十四章

町中を大事に菊の使かな 畝波

待山に大工つかふて冬籠 宴池

九丁裏

京極は片側白し梅の花 素琴

折も惜し見て居れば寒し梅の花 由司

日の軒や馬を遊す冬籠 竹茂

尼寺や同じ浅黄の衣更 二竹

こけ落て花盗人の笑哉 閑水

月さらさら行雲移る時雨哉 乙人

雲切や雨の中より秋の月 竹宇

一かたへ匂ふ夜の梅白し 可友

待恋や思ひにからむ虫の声
菊人

十丁目

曙や障子に移る月の影
枕石

蜘蛛の囀の欠て落けり五月雨
素菊

夕顔や夜の移る間の花白し
畝司

晩鐘をいかか答へて散一葉
志村 亮岱

姥の名は如老く月の長者哉
田切 积里考

梅か香に笈のゆるむ賤屋哉
积 三双

古を傾けて見るしくれ哉
壽輦

風や木葉の上に渡し船
西条 素涼

五月雨や水鶏昼鳴麻畑
おなしく

(以下二に続く)

(東京都立産業技術高等専門学校ものづくり工学科 一般科)